# 日女若

～ 市川新之丞の恋物語 ～

安達 真魚

水面に映る　浮かぶ藻の花
春招く光　手賀の浦
入り江の小舟　ひばりが歌う
どこまでも響き渡る　乙女の笑い声
やるせない想い　切ない想い
あこがれと果たすべきこと　もつれあう心
One more time for you　もう一度
あなたのために　できること

森の若葉　木洩れ日降り注ぐ
迫りくる駒音　延命寺
荒武者蹴散らして　守りぬきたい
傷つき疲れはててても　命尽きるまで

恋に焦がれて　悶え苦しむ
いとしさとなすべきこと　からみあう心

One more time for you　もう一度
あなたのために　できること

いま最後に　あなたの腕に抱かれて
幸せな自分が　ここにいます
そしていまここで　箕輪の人となって
あなたのあたたかな　愛を受けたい

## カンナ街道

走り抜ける車　あてのない１日
たたずむ赤い花　日暮らし思い続ける
水辺に広がる　青いジュータン
もう桜の　季節忘れてる
手賀の裏里　カンナ街道
あの熱い想いは　どこへいくの

西日に向かって　続くアスファルト
サングラス越し　見える花街道
君との想い出　忘れないように
色あせないで　咲いてて欲しい
手賀の裏里　カンナ街道
君とならばいつか　分かり合えると

会うたびに変わる　君のその瞳
疑うことが　できなくて
手賀の裏里　カンナ街道
この胸のせつなさ　抱いて走る道
手賀の　裏里　カンナ街道
あの熱い想いは　どこへいくの

## 夢涯てるまで

冴え渡る星空　北斗の光
苦難と向き合い　歩き続ける
あなたから聞いた言葉　どこまでもいつまでも
私の心に　寄り添っている
It's the Mission.　Land Surveying.
涯てしない旅路　もう戻れない　いまは戻らない

描いた願望　思いたった覚悟
夕闇のなかで　輝きつづける

どこまでも続く　海岸線
海鳥が招く　白い砂浜
果たすべき我が務め　どこまでもいつまでも

私の胸を　突き動かしている
It's the Mission.　Land Surveying.
涯てしない旅路　もう戻れないいまは戻らない

思うふるさと　帰れないその日まで
いまここで　夢涯てるまで

運命の歯車　周り続けている
いまここで　夢涯てるまで

## 光に満たされて

与えられた命　さまよった命
ひとつだけの命　光に満たされて

嵐の中に　探し続けた
生きるための祈り　我が使命
広がる宇宙　その果てに
見えてくる　すべての真実の姿
短い生涯　稲妻のように
独りで生まれ　独りで去っていく

与えられた命　さまよった命
ひとつだけの命　光に満たされて

すべての人が　輝きだす
教え　導くこと　我が使命
正しい道は　そこにある
あなたがここで今　見ている道

迷い傷つき　絶望しても
幸せになる　命尽きるまで

ひらめく悟り　目の覚める悟り
迷い解ける悟り　真理を開くために

与えられた命　さまよった命
ひとつだけの命　光に満たされて

## Y & Y

暖かな陽射し　光受ける山懐
親元を遠く離れ　ここまで来た
二人巡り合った　定められた奇跡
貧しさのなかで　わかりーあえた

大きな力受けて　ともに歩き出す
君のために生きる　君とともに生きる

里からのたより　風のなかに聞こえる
この想い遠くまで　届くように
二人くらし重ねた　新しい旅立ち
めばえたこの命　愛すべき宝もの

哀しみどれほど　降りかかっても
励み動き続けた　途ぎれもなく

守るべき強い絆　時は移ろっても
皆のために生きる　皆とともに生きる

遥かな思い出　夢のなかに消えていく
この祈り遠くまで　届くように

## 哀しみの向こう側

歩いてごらん　笑ってごらん
さあ立ち上がって　おしゃべりしてごらん
この世に生まれ　みんなに囲まれ
君は生まれてきた　幸せになるために
いつか心病んで　いつか辛くてなっても
哀しみの向こう側に　微笑みがある

Because　それは命　Because　たった一つの
たった一つの　君の命だから

飛んでごらん　泣いてごらん
さあ立ち止まって　いい顔見せてごらん
生まれきてくれて　ほんとにありがとう
君には君の　未来がある
いつかむなしくなって　いつか誇り失っても
哀しみの向こう側に　微笑みがある

Because　それは命　Because　たった一つの
たった一つの　君の命だから
Because　それは命　Because　たった一つの
Because　(Woo)　Because　(Woo)

## あとがき

筆者は、この数年趣味で歌入りの曲を作って楽しんでいるが、現在制作中の曲のいくつかについて、それらの詩を載せていただいた。制作している曲の曲調はポップスを基調にしているつもりなのだが、どうしてもフォーク調になることが多く、ロック調の曲を目指して日々努力している。しかし、世代間のギャップはなかなか埋めることができず、カラオケで子や孫が歌っている曲などにはついていけない状況は変わらないでいる。そんななかで例えば最近脚光をあびている「あいみょん」の曲などを聴くと、まだ若いのにアコースティックをベースにしているので、違和感なく受け入れることができる中高年者も多いのではないだろうか。昔から音楽のジャンルは幅広いが、ポップス一つだけでも多様化の一途である。

詩の内容などについては、本誌にあっているのかどうかよくわかっていない。本誌がジャンルを広げているということなのでご了承いただきたい。曲ありの詩は、当然、詩の書き方や構成は違うので、違和感があるかもしれない。

このような作品を作っている人はそのテーマを何にするか、いつも皆さん苦労しているのではないかと想像する。自分の場合もそこが一番肝心なところだと心得ている。しかし、いつも愛だとか恋だとかでは面白くないので、安直に歴史とか地域とかにテーマを求めているのが実情である。